

オープンソース事情

12 自由ソフトウェア活動を続ける

g 新部 裕

特定非営利活動法人フリーソフトウェアイニシアティブ
／ (独) 産業技術総合研究所

Buggy な夢

ブーン、ブンブン。うるさい。Bug がなにやら言っている。うるさくて眠れない、「テ・ン・ヲ...」、なんだか「天を目指せ!」と言ってるようだ。ここはどこだ? パシッ、と鋭い音がする。ヌーの尻尾だ。ヌーは遠くの草原に佇み、こちらを静かにじっと見ている。尻尾は時に鞭のように動き、厳しい音を出す。

草原から離れて、どこだここは。南極か。ペンギンがけたたましい。「飛べないし...」と言い訳を一方に言い、また、一方で公衆に対し大声で「全然オッケー!」と肯定してる、威勢が良いのはいいけれど、そのおでん、自分だけで食べるわけかい? なんで、おでんだ?

光かがやく極地から暗転。暗闇の中、今度はブツブツと独り言なのか、訴えなのか。悩みごとのつぶやきが聞こえる。「どうしよう?」、これは心の SOS か。

謎の夢。イメージにひたっついてはいけないと、体が反応する。朝だ、ふとんから出よう、起き上がろう。

自由ソフトウェア修行中

僕は「自由ソフトウェア活動」を十数余年続けてきた。正確には、今になってそれを「自由ソフトウェア活動」と呼んでいる。ソフトウェアの自由を希求し、行動することだ。ソフトウェアの「自由」とはどう定義すべきで、それがマクロ的に見て、なんであるのかはまだよ

く分かってない。いまだ修行中だ。

いろんなことをやってきた

僕の自由ソフトウェア活動はこれまで多岐にわたる。いろいろな立場で、いろんなことをやってきた。

僕は、入力方式 mlh, X11 フォワーダ Xp-BETA, 分散ハノイプロトコル GDHP, GNU GPL Display を製作し、発表してきた。また、「世界」のハッカーとともに開放型のプロジェクトを進めてきた。GNU Emacs の機能拡張, GCC, GNU Binutils, GNU Debugger のアーキテクチャサポート拡張を行った。GNU C library は、libc6 の初期テスタとして参加、後にアーキテクチャサポート拡張を行った。Linux のドライバ保守, アーキテクチャサポート拡張の指揮/お手伝い/落ち穂拾いを行ってきた。また、Debian Developer として、ディストリビューションの中でソフトウェアのパッケージを保守している。

NPO として「フリーソフトウェアイニシアティブ」を立ち上げた。市民活動としての自由ソフトウェア活動を模索している。ここでは経理事務を主にやっている。国際活動としては、各地の自由ソフトウェア活動家と交流し、昨年からは自由ソフトウェアのライセンスである GPLv3 の活動に参加している。著作物や特許の権利に関する国際政治、法律の運用に関連する内容もある。

「日本」という地域で行政と向き合い、いろいろなプロジェクトにかかわった。ICOT Free Software, 開放型基盤ソフトウェア, RING プロジェクト, 未踏ソフトウェア, オープンソフトウェアに参加/参画した。自由ソフトウェアが、社会に認められないものかと挑戦した。そして、これは僕にとって対価を得る「労働」でもあった。

僕は、自由ソフトウェア活動の位置付けを求めて、公的資金で自由ソフトウェアを実施することに努力し、少しだけだが成功した。公的な研究開発において自由ソフトウェアを公式にアウトプットとする前例を作ることができたのだ。それまでは、国の研究資金で開発したソフトウェアを解放するという考えは日本では否定され続けていた。自由ソフトウェアを対象として、公募を行い、実施し、リリースまでできたのは、未踏ソフトウェアにおける僕の実践が最初だ。期を画す出来事だったと言える。今では、それは当たり前になっているのだから。

僕の自由ソフトウェア活動は、自由ソフトウェアの実践、オープンソースソフトウェア運動、パスワードとしての "OSS" と 3 つあると考えている。これは一連の活動だが、立場がそれぞれ異なる。以下では、このそれぞれについて述べ、その後に展望を述べる。

自由ソフトウェア, それは実践だ

自由ソフトウェアは理念である前に実践だと思う。これは僕がその初期のころからかかってきて、自由ソフトウェアの経緯をともに追ってきたからかもしれない。

ソフトウェアの自由を(たまには)考えて、自分なりに考えて自分で進める、これが僕にとっての自由ソフトウェア活動だ。障壁はあったし、いさかいもたくさんあった。数多くの失敗もした。それでも続けてきた。

自由ソフトウェアにとっては理念も重要

自由ソフトウェアにとっては、その理念、考え方を重要視する。ソフトウェアの自由、それが大事だ。4つの自由として、

- 0: 制限なく実行できる
- 1: 研究し、改造できる
- 2: 隣人に配る
- 3: 改造を配り、社会に役立てる

を定義し、これを守るライセンスの仕組み、コピーレフト(後述)を武器とする。

ただし、この定義や仕組みは、かなり考えられたもの

だが、まだ途上のもので結論といったものではないと思う。まだ、「思想」と言えるまで洗練されていないだろう。経緯からすれば、これは実践の中でボトムアップで、つまり後付けで、「定義」されたものだ。

だから、僕は、現時点での理念の啓発普及については、「自由ソフトウェア運動」と呼び、具体的な自由ソフトウェア活動と区別したいと考える。理念の啓発普及を支持するけれども、1つの「定義」だけを、無批判に、そのまま受け入れるのではなく、自分でもいろいろ考え続けたい。自由ソフトウェア活動を続ける中で、時に自分でも理念を考えるという姿勢だ。

自由ソフトウェアは武器を持つ

自由ソフトウェアの強力なツールがコピーレフトである。自由を保証・強制するライセンスの仕組みである。ここで、コピーレフトは、僕は、

「自由」が呪縛する、

と言えると思う。この一見、矛盾するかのような表現がその仕組みをよく表すと思う。自由ソフトウェア活動の強力な点も弱点も、ここにあると考えている。

著作権に基づき、自由ソフトウェアの4つの自由を守ることを条件として許諾をするという構造を持ち、改造

OSS君, SOS!



に対して同一のライセンスを要請する（この要請は、自由を保証するものとして正当化される）。これは独占ソフトウェアに対抗するために考案された仕組みであり、実に良くできたトリッキーな仕組みである。

コピーレフトのライセンスとして、GNU GPL (General Public License) がある。現在、GNU GPL は第三版の改訂作業中である。GNU GPL はソフトウェア特許や Tivoization（デジタル署名を用いてソフトウェアの変更を禁止すること）に対抗する。

オープンソースソフトウェア (Open Source Software)

オープンソースソフトウェア運動は産業界に広がった。自由ソフトウェアの実践は各地でたくさんの人に広がったが、その理念を広める「自由ソフトウェア運動」は、それほど広がらなかった。代わりに広がったのが、オープンソースソフトウェア運動である。

自由ソフトウェアの理念が Free Software Foundation のもの 1 つだけであるという押しつけを嫌い、多元化した自由が唱われた。

オープンソースソフトウェア運動は、自由ソフトウェアを呼びかえて、その有用性と開放型の開発を説くものだ。利用と普及に関して、オープンソースソフトウェア運動は実に成功した。理念や考え方といった問題には立ち入らないことで既存のビジネスやその慣習との衝突を回避し、多元化のモデルと開放型の開発を広めた。「考え方は違って、その実利を享受することはできるのだから」と。これはある意味、とても賢い。

自由ソフトウェアの立場からは残念なことに、自由ソフトウェアではないものの存在をも許容する。場合によっては、独占ソフトウェアの利用を推奨することさえある。僕は、この点は誤りだと考える。多元化は肯けるけど。

OSS はどこまで広がるか？

バズワード "OSS" は政府によって広がった。

OSS はオープンソースソフトウェアの略称とされるが、まったく違うところにまでさらに広がった。ここは無原則と言ってよいかもしれない。それだけ広がった。

略称の利用は、オープンソースソフトウェアからさらにいっそう理念から遠ざかることを進めた。オープンソースソフトウェア運動では「考え方は違ってよい」程度だったが、OSS では「理念などはまったく考えないように」となってしまったかのようである。

「それぞれの考えを尊重する」というのと「考えなくてよい」はまったく違う。OSS では、オープンソースソフトウェア運動から発展し、「有用ならば」と思考停止する結果となってしまったのかもしれない。「政府が進める計画だから良いものだ」では、主体性はどこにもない。自由の希求は、どこにあるのか。

間違っちゃうと、ここには全体主義という危険性もある。「みんながやってるから」と迎合ばかりでは、無批判の形ができあがる。それはいったい誰のためだ？

僕の行政に対する挑戦は間違いではなかったと思う。だが現状はどうだ？ 無批判と迎合の「みんなが OSS」の状況には、「まったく違うものだ」と叫べるしかない。

自由ソフトウェアをもう一度

OSS までに至り、僕は“とにかくやる”というだけで突っ走ったことを深く反省し、理念、思考の大切さを痛感している。自由ソフトウェアに戻って、もう一度活動を続けることとした。ただし自由ソフトウェア運動も決して十分ではない。そこに権威を求め、誰もが考えなくなってしまうば OSS と同じことだ。幸いにして、自由ソフトウェアもいろいろな地域に活動が広がり、多元化の萌しがある。

小さな間違いを看過しない。Bug は細部に宿る。

世の中にはいろいろな人がいていろいろな考えがある。理念や考え方については無理に結論を急がなくてもよい。でも考えることを放棄してはダメだ。たまには考えよう。そして、状況に応じて手を動かす実践を続けよう。

Happy Hacking,

参考文献

- 1) g 新部 裕：20 世紀の名著名論：Richard M. Stallman : The GNU Manifesto, 情報処理, Vol 44, No.7, p.765 (July 2003).
- 2) Stallman, R.: Free Software, Free Society : Selected Essays of Richard M. Stallman, GNU Press (2002).

(平成 19 年 1 月 22 日受付)

g 新部 裕 (正会員)
gniiibe@fsij.org

1991 年電気通信大学大学院電気通信学研究所修士課程修了。1989 年より GNU プロジェクトにかかわる。"GNU" を表す漢字「g 新」を提唱。ログイン名、ペンネームに用いて 16 年。FSF 賛助会員。IEEE 会員。